二〇二四年度　入学試験問題

国　語

第一回

【注　意】

・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
・問題は一ページから九ページまでです。
・解答はすべて解答用紙に記入してください。
・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
・記号・句読点がある場合は字数に含(ふく)みます。
・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。

洗足学園中学校

1 次の文章は、フランスの十歳〜十五歳の子どもたちに向けたある哲学者の講演記録で、「現代社会における宗教や、何かを信じることについて、哲学はどのような立場をとっているのか、また道徳心や道徳は今どこにあるのか」という聴衆の子どもからの質疑に応答してこの哲学者が語ったものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

宗教と哲学の関係は、歴史的にみると複雑です。ソクラテスは他の多くのギリシャ哲学者同様に、敬虔でないことを咎められました。というのも彼はある種の信仰を問題視したからです。だからといってソクラテスが敬虔でなかったということではありません。敬虔というのは正確には宗教的ということではないのです。プロタゴラス〔古代ギリシャの哲学者、ソフィストと呼ばれた弁論の専門家〕をはじめ多くの人が、同じ理由で国外に追放されました。

私は、当時のギリシャ人に宗教という観念があったとは思いません。宗教というものは一神教〔神は唯一であるとし、その神をあがめる信仰のかたち〕と共に始まったと私は考えるからです。でもいずれにせよ、哲学者というのはある意味で、敬虔さとか信心とか宗教といった観念をひっくるめた信仰の世界にとっての ア テキとみなされてきました。その一方ではまた、プラトン〔ソクラテスの弟子であった古代ギリシャの哲学者〕とソクラテスによって、存在論的神学、つまり存在というものを神から考えようとする哲学上の大きな流れが始まったとも言われるのですよ。たとえギリシャ哲学が聖なるものの世界との断絶によって始まったとしても、それはすぐさま神学、すなわち神と宗教に関する理論を作り上げることにつながったのです。

こうして★新プラトン主義から始まってカント〔一八世紀ドイツの哲学者〕に至るまで、つまり一八世紀の最後の最後までずっと、哲学といえば神学、つまり神についての学問であり、哲学は宗教と堅く結びついたものでした。もっとも毎度のことながら、そこにも例外はありました。たとえばディドロ〔一八世紀フランスの思想家。無神論者として投獄されたりした〕です。

ディドロが主張したような★無神論が現れたのは、ですから哲学の歴史の中ではずいぶん後になってからでした。それ以前に教会の★教条主義を拒否した哲学者たちも（その人たちは科学者でもあったのですが）、無神論者だったわけでは全くなかったのですから。 A 一九世紀の初めになって、哲学では突然、神は死んだと主張し始めたのです。そしてニーチェ〔一九世紀ドイツの哲学者〕は、一九世紀の終わりに、こう付け加えました。「神は死んだ。そしておまえたちが、神を殺したのだ」と。「おまえたち」というのは、つまり (1) のことです。ニーチェの言葉が意味していたのは、もう人間社会は聖書の★啓示のままには動いていかないということです。聖書というのは★旧約聖書や★福音書や★コーランのことです。なぜなら今や新しい信仰が、これまでの信仰や啓示に取って代わったからです。その新しい信仰とは、人間の進歩を信じるということでした。でもニーチェは、それによって人間は結局もう何も信じられなくなるだろうと言い、そのことをニヒリズムと名付けました。何も信じられなくなるというのは、すべてが計算の対象となってしまうからです。まず欲望が、そしてとりわけ小さな子どもたちの、学びたい、新しいことを知りたいという欲望が、計算の対象になってしまうのです。でも欲望を計算で測ろうとすれば、その欲望は欲望ではなくなってしまうでしょう。そして私はいつも言うのですが、それでは子ども時代が イ ダイナしになるのです。つまりむずかしいこと、大変なことを好んでやる気持ちが失われてしまい、個人の欲望を社会的なものに変えていくことができなくなっていってしまうのです。なぜならそのような社会化は、むずかしいことを好んで求め、それによってもっともっと上を目指していく★「昇華」に基づいているからです。

このように、欲望を持ってそれを高めていくことができなくなるという背景があって、(2)宗教への回帰（そう呼ばれているのが正しいかどうかはともかく）という現象が起こっているのかも知れません。私たちはもう何も信じられないという時代に生きています。今はもう神も、社会の ウ ハッテンも、技術や科学の進歩も信じられず、何もかもが疑わしい時代です。ところが資本主義の世界はまさに「信じる」ということを必要としているだけに、問題はよりいっそう深刻なのです。なにしろ資本主義は「信用（クレジット）」のうちに成り立つのですから。資本主義は信用を前提としていますが、でも信用というものがあるためには、未来を信じなければなりません。なのに今の世界にはもう未来を信じる気持ちがなくなってきていますから、そういうわけで昔の信仰に戻ろうとする人たちがいるのです。昔の信仰というのは資本主義以前の信仰のかたちということで、ドイツの哲学者であり社会学者でもあった★マックス・ウェーバーが言う★合理化への信仰のことではありません。

まさに(3)この合理化によって、あらゆる信じる気持ちが破壊されてしまい、もうみなさんおわかりのようにあらゆる希望が失われてしまったのですから。

宗教的なかたちを取る信仰が何よりまず示そうとするのは、すべてを計算に切りつめることなどできないということです（それを示してこそ、信仰の意味があるはずです）。そして(4)本当に信じられるのは計算できないことだけなのです。計算によってわかってしまえるようなことを人は信じたりしません。でも、理解したり知ることができないようなこともこの世にはあります。B「美」とか「正義」のように。そして欲望が向かう対象とはそもそもこのように計算できないものなのです。計算しえない対象、つまりあらゆる計算を超えてしまうようなものだからこそ、それを求めることができるのです。C、信じることができないときには、欲望というものはありえません。信じる気持ちを破壊すれば、結局欲望も破壊されてしまいます。そして欲望を奪ってしまえば、信じる気持ちも失われるのです。

D、ニーチェも言ったとおり、今や「あらたな信仰」つまり信じるということのあらたなかたちを創始すべきときなのです。

（中略）

目下私は、『無信仰と不信』というシリーズの本を書いています。そこで私が主張しているのは次のようなことです。哲学者とか政治家、科学者とか芸術家とか宗教家など、世界をもう一度みんなが望むような世界に立て直したい、つまり計算に切りつめられてしまうことのない豊かな世界（計算できないってことは、単純でない「むずかしい」ということです）を作りたいと願う人たちなら誰でも、「確固としたもの」が今必要なのだということを考えなければなりません。確固としたものと私が呼んでいるのは、今ここに見えるようなかたちでは存在しないのに、それでいて、今ここにいる人たちの生き方によって成り立ち、内実を持っているもののことです。そのものとして存在してはいないのに、生に手応えを与えてくれるような確固としたものを考慮して生きている人たちは、単に生存している状態、つまり生物としての単なる欲求だけで生きている状態を超え出て、自分自身を高めていくことができるでしょう。それが、単なる欲求や衝動に終わってしまわない欲望を持って生きるということなのです。

神が死んでしまったあと、われわれに突きつけられている真の問題とは、この確固としたものを問う困難な問題――ここでの「困難」とはエマニュエル・レヴィナス〔二〇世紀フランスのユダヤ人哲学者〕が「困難な自由」と言うときの意味でなのですが――にどう対処するか、ということなのです。みなさんも知っているでしょうが、イスラム教やユダヤ教では神のことを絵や彫像で表すことはエキンじられています。キリスト教では表してもいいのですが、ただしそのとき神はわれわれとは別の次元に示されます。「天に★ます」というように神は天、つまり高いところに描かれるのです。★いと高きところ、オシコウの神という言い方をしますね。そのように呼ぶことでもわかるように、一神教の神というのは、ここにコップがあると言うのと同じ意味で「ある」わけではないのです。神は自然の中にいるわけではないし、時間の中にもいないし、空間の中にもいない。なのに神は、時間と空間の中に生きる存在にとって不可欠なものなのです。

そして、(5)神が死んでしまった現代において信じる対象になりうるのは、やはり〔神がかつてそうであったように〕別の次元を構成しているものだと私は思うのです。

（ベルナール・スティグレール『向上心について――人間の大きくなりたいという欲望』メランベルジェ眞紀　訳）

★新プラトン主義……三世紀ごろプロティノスという哲学者がプラトンの教説を受け継ぎ、創始したと言われる思想。
★無神論……神の存在を否定する考え方。
★教条主義……権威者の述べたことをうのみにし、それに基づいて判断、行動する態度。
★啓示……人間の理解を越えたことがらについて教え示すこと。
★旧約聖書……キリスト出現以前の神の古い約束を告げた聖書。ユダヤ教の聖典。キリスト教の経典。
★福音書……キリストの教訓や一生を記した新約聖書の冒頭の四巻のこと。
★コーラン……イスラム教の聖典。
★昇華……心理学の用語。満たされない欲求や葛藤を、社会的に認められている価値ある行動に変えて自己実現を図ろうとすること。

★マックス・ウェーバー…ドイツの哲学者、社会学者、経済学者（一八六四～一九二〇）。
★合理化……ここでは、すべてを計算可能とみなす、という意味。
★ます……古語。「いらっしゃる」という意味。
★いと……古語。頂点に達する様子。とても、非常に、という意味。

問一 [(1)] に入れる言葉を五字以内で書きなさい。

問二 ――(2)「宗教への回帰（そう呼ばれているのが正しいかどうかはともかく）という現象が起こっている」とありますが、本文によれば、これはどういう「現象」ですか。三行以内で説明しなさい。

問三 ――(3)「この合理化によって、あらゆる信じる気持ちが破壊されてしまい」とありますが、これはどういうことですか。本文の内容に沿って、三行以内で説明しなさい。

問四 ――(4)「本当に信じられるのは計算できないことだけなのです。」とありますが、この表現が意図している内容の説明として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人は合理化によって世の中を知りたいと思うようになるが、何を信じるかの対象はもともと計算できないものだけなのだということ。
イ 人は希望を失わずに生きるために、現代の計算可能な世界に落ちつくことができず、あらゆる信じる気持ちを失ったのだということ。
ウ 人は世界の成り立ちやしくみを理解する上で、計算可能な次元での説明では納得できず、だからこそ信仰が生まれるのだということ。
エ 人は物事を信じる気持ちを失ってしまったので、常に疑うという気持ちを強くして新たに世界を創り直す必要があるのだということ。

問五 ――(5)「神が死んでしまった現代において信じる対象になりうるのは、やはり〔神がかつてそうであったように〕別の次元を構成しているものだ」とありますが、ここでいう「別の次元を構成しているもの」とはどういうものですか。本文の内容に沿って、三行以内で説明しなさい。

問六 [A]～[D] の中に入れる語として正しいものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア 言いかえれば　**イ** ところが
ウ ですから　**エ** たとえば

問七 ――ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 信仰のあり方は、昔も今も本質的には変わらないが、「神は死んだ」というニーチェの時代から現代に至るまで、信じるという行為自体は危険なものである。
イ むずかしいことを求めてもっと上を目指そうとする欲望は、人間本来の姿であるが、その時こそ神の存在について現代に示す機会なのだと知るべきである。
ウ 何もかもが疑わしい現代だからこそ世界をすべて計算可能なものと見なす「合理化への信仰」が芽生えてきたのであり、われわれはその点を再考すべきだ。
エ 合理化が進み、世界をすべて計算可能なものにしてしまった現代の社会であるがゆえに、私たちは新たに信じるということの意味を問い直してゆくべきだ。

2 次の文章は、瀬尾まいこ『掬えば手には』の一節です。これまでの主なあらすじを読んだ後、本文を読んで後の問いに答えなさい。

これまでの主なあらすじ

主人公の梨木匠はごく普通の大学生で、人の心が読めることを取り柄にし、その能力を必死で信じているが、他には個性と言えるようなものを持っていないことに悩んでいる。大学サークルには所属していなかったが、ある時、友人の河野さんから、スポーツサークルのバスケットボールの試合に負けて怒っている香山の機嫌を取ってきてほしいと頼まれる。これがきっかけで、ある時香山の方からマラソン大会に一緒に出ようと熱烈に誘われる。高校時代の香山は卓球部だった。このマラソン大会の結果は、梨木は百人中四十九位。香山は十一位だったが、何か納得のいかない表情をする。そして梨木に小学校の高学年のころよく走っていたことを言いかけてやめる。梨木はマラソン大会に参加して久しぶりに爽快感を味わうことができた。その後、今度は梨木の方から香山を別のマラソン大会に誘う。走るのが楽しくなったのと、香山の話の続きを聞きたかったからである。結果は、梨木は五十人中二十五位、香山は十一位だった。梨木は「お互い順位以外は満足だろう」と笑った。

「梨木の走り、マジでよかったぜ」

「ありがとう。香山もなって、すれ違った時しか見てないけど」

参加賞のスポーツ飲料とタオルを受け取ると、ぼくたちは川沿いに座り込んだ。走り終えた人たちがストレッチをしたり、寝転がったりしている。

「小学校のころの香山って、走り速かったんだよな」

ぼくがスポーツ飲料を一口飲んでそう言うと、

「何、突然？」

と、汗をぬぐっていた香山はぼくのほうに顔を向けた。

会話にはタイミングがある。特にまじめな話だと、適した場所や状況、相手の気持ちの盛り上がり。いろんな要素が必要だ。だけど、タイミングなんて待っていたら、知ることができないものがたくさんある。ぼくはかまわず話を続けた。

「前、話しかけてただろう。小学校の時走ってたって」

「ああ、こないだのマラソン大会の後？」

香山もあの日、話しきれてないことがどこかで気になっていたのだろう。すぐにそう言い当てた。

「そう。途中になっちゃってたからさ。小学校の時、香山どんなふうに走ってたの？」

「えっと、俺さ、めちゃくちゃ速かったんだ」

香山はスポーツ飲料を飲み干すと、「自分で言うのもなんだけどな」と笑ってから話し出した。

「一年の時から卒業まで運動会でも負けたことなかったし、いつもクラスで一番速かったんだ。高学年のころはよく走ってて、学校では段トツだった」

「それ、かなりかっこいいじゃん」

「だろ。それで、中学一年の体育の授業で100メートルの記録とったら、12秒23でさ」

陸上部でもなかったぼくには、それがどれくらいすごい記録かはいまいちピンと来なかった。

「あ、これ、相当速いんだからな。まあ、その時は俺自身もピンと来てなかったんだけど」

香山はそう笑った。

「中学の体育の教師、新井って名前だったんだけど、そいつが『練習もしてないのに、一年生で12秒台走れるなんて、ジュニアオリンピックも夢じゃない』とか興奮してさ。なんかわからないうちに、翌日から陸上練習に参加させられたんだ。俺、バスケ部だったのにだよ。部活が終わって［A］の体で一時間近く陸上の練習させられてさ」

「うわ、たいへんそう」

「中一なんてまだ子どもだし、意識も低いから、嫌で嫌で。地獄だとしか思えなかった」

「でも、部活終わりに練習つけてもらえるってことはよっぽど才能あったんだな」

ハードなのはわかるけど、うらやましかった。中学一年生。ぼくが、運動も音楽も勉強もどれだけ努力したって、そこそこにしかなりそうにないことに気づいたころだ。

「まあな。今まで何もしてなかった分、練習したらすぐ結果に結びついて、

その夏に出た大会では11秒55で一位とったんだ。俺がこれで解放されるとほっとしてる横で、新井は『この調子ならブロック大会でも優勝狙えるな』と［ a ］としてた。その時、俺、絶望したんだ。え？　これで終わりじゃないの？　まだ練習が続くのかって」

「期待されるのって、貴重なことだけどな」

「それが十二歳の俺にはさっぱりわからなくてさ。しかも、バスケ部の先輩には『陸上ばっかでこっち手抜くなよ』と言われるし、陸上部の先輩にもにらまれるし、新井は怖いし。もう心身ともにボロボロ」

「それは想像できるな。突然来た一年に追い抜かされたら先輩はたまんないもんな」

「だろう。とにかく次の大会までは耐えようってがんばったんだ。そこでも優勝を果たして、これで解放されるって喜んだら、次は県大会だぞと言われて。そこで、これはやばいって思った。このままだと俺、走り続けることになるって」

　そこまで話すと、香山は足を伸ばして座りなおした。ぼくもなんとなく同じ姿勢をとる。

「先生が怖くて従ってただけで、俺は走るのが好きなわけじゃないと思ったんだ。スポーツは好きだ。でも、それはバスケや野球が好きなだけで、こつこつ練習して記録を上げていく陸上が好きなんじゃないって。中学一年生の俺は、速く走ることや、記録を出すことに意味を見出してなかったんだ」

「もしかして辞めちゃったの？」

　ぼくはそう聞いた。

「そう。どうしてこんなしんどい思いをしないといけないのだろうって疑問でさ。新井に辞めたいって必死で訴えた」

「辞めさせてくれないだろう。そんなの」

「ああ、だから捻挫したって嘘ついて、練習サボって。二学期からは体育の授業でも気づかれない程度に流して走るようになった。11秒台だったのを12秒台後半で走るように調節してさ。そのうち、先生も諦めたのか見損なったのか声かけてこなくなった。今思うとすごいばかだけど」

「もったいないような気もするけど、でも、まあ、そういうのもありのような」

　もったいない。そう言い切ってしまうと、今の香山を否定するようで、ぼくは［ I ］を濁した。

「まあな。新井は二年生になっても時々声をかけてくれたけど、三年になると誰にも陸上のこと言われなくなったな。そこで初めて、(1)とんでもないことをしてしまったのかもって思うようになった」

「だけど、本気で走ればまだ速かったんだろう？　もう一度走ろうって思わなかったの？」

「本気で走るのが怖かったんだ。全力で走ったところで、もう前みたいに走れなくなってることを知るのが怖かった。ずっと練習せずに体を甘やかしてて、いい記録が出るわけないって、三年生になった俺はわかってたし」

　香山はそう言うと、

「ま、そもそも、こんな根性だから、そのまま陸上やってたとしても、二年三年と重ねるうちに、たいしたことなくなってただろうけどさ」

　と笑った。

　スポーツで上位をキープしている人は、身体能力だけじゃなく、精神的にも強い。逃げ出そうとしていた香山がそのまま続けていたとしても、どこかで躓いていた可能性は高い。だけど、もしも。もしも真剣にやっていたとしたら、どうなっただろう。自分が歩んでいたかもしれない道を想像したくなる気持ちはわかる。何もわからず判断していた無知だった自分を、悔やみたくもなるだろう。

「もし、中学一年生の時に戻れたらどうする？」

「そりゃ、もう一度チャンスがあったら走りたいよ。辞めずに続けて、自分の力を試してみたい」

　香山は迷いなく答えた。

「そのままやってたら、香山、陸上選手になってたかな」

「それは無理だな。何年間必死で走っても、よくて県大会入賞ぐらいだろうと思うよ。それでも、真剣にやってみたいと思う」

「すごいな」

「すごくないよ。それに気づいたの、大学に入ってからだもん。サークル活動して、『楽しもう』がモットーの空気にどこかしっくりいかなくて。ああ、そっか、俺、真剣にやりたいんだって、初めて気づいたよ。遅すぎだろう」

(2)香山は声に出して笑った。十時を過ぎ、日が少し高くなって風は和らいでいる。

「今でも時々本気で走りたくなるんだ？」
「どうだろう。走ったのなんて、こないだのマラソン大会が久しぶりだからな。体育館で梨木に会って、あのころの気持ちがよみがえって、こいつとだったら一緒に走れそうって、思い立ったんだよな」
あの時は河野さんに頼まれて、適当に香山の機嫌がよくなりそうな言葉を並べただけだ。ぼくは「熱心に運動してたわけでもないくせに、なんだかんだ言っちゃったな」と肩をすくめた。
「走ってみて自分の実力を思い知ったよ。想像していた以上にたいしたことないって［　B　］きた」
それであのレース後の香山はどこか浮かなかったのか。ぼくは「そんなことないだろうけど」とつぶやいた。
(3)「でもさ、梨木と走ってよかった。あのレースで終わりだと思ってた。自分の走力がわかって、もう十分だなって。それなのに、こんなふうに続きがあったなんてさ」
「だったらよかった」
走ることを手放してしまった香山は、何か大事なものを失ったのだろうか。光が射す道からそれてしまったのだろうか。それはわからない。けれど、陸上にまったく興味がなかったぼくを、走らせたじゃないか。そして、走るのがこんなにも気持ちがいいことを教えてくれたじゃないか。それを伝えたいと思ったけれど、どう話せばいいかわからなかった。
「梨木は？」
迷っていると、香山に言われた。
「え？」
「梨木の話も聞かせてよ」
「ぼくの話？」
「そう。いろいろあっただろ。単純明快に暗いところゼロで十代をやり過ごしているやつなんていないもんな」
香山はそう言った。
香山の打ち明け話はかっこいい。走ることを放棄したことは、淀んだまま香山の中に残っているのかもしれない。だけど、速く走れるという才能があったのだ。能力があるものは、挫折すら輝きがある。
「つまらないことしかないけどさ」
ぼくはそう言い訳をしてから、言葉を続けた。

(4)「ぼくはさ、中学三年生の時、他人の心が読める能力があるかもって」
「何それ？　すごい話じゃん」
香山は目を見開いた。香山はいつもまっすぐにぼくの話に乗りこんでくれる。
「すごくないよ。不登校だった女の子がいて、その子が教室に入ってきた時なんだけど」
ぼくは名前を上げずに、★三雲さんが席に着きにくそうにしていた時フォローしたこと、それで、周りからエスパーだとはやし立てられたこと、高校生になってからの吉沢のことなどを話した。
「そっか。それで、梨木、体育館で俺に声かけてくれたんだ。速く走れるよりよっぽどすごい」
香山は真顔で感心してくれた。
「ただの偶然。それを一人で特別な力だって信じこもうと必死で」
「そうなの？」
「そう。ぼくは、本当にごく普通の平均ど真ん中のやつでさ。ほら、今日も二十五位だっただろう」
「何でも［　Ⅱ　］なくこなせるって、いいじゃん」
そう言う香山に、ぼくは首を横に振った。
「長所もないんだよ。運動も勉強もなにもかも、とにかく普通でさ。特徴ゼロ。そんな自分をずっとどうにかしたかったんだ」
「できないんじゃなくて、それなりにできるんだろう。それってそんなに悩まないといけないことか？」
香山は［　Ⅲ　］に落ちない顔をする。
「そう言われたらそうかもしれないけど、でも、ぼくの家は親も姉もみんな何かができて、そのせいか、平凡なことがものすごくつまらなく感じて。だから、人の心が読めるって言われた時、ようやく何か特別なものを与えられたようで、それに飛びついてた」
中学や高校の時のぼくは、走るのを辞めた時の香山と同じように無知で、自分の能力を信じこめる力があった。
「だけど、多少は他人のことがわかるんだろう？　俺に声かけてくれた時も、あたってたよ」
「誰だって人の心ぐらい読めることあるよ。もちろん、当たりはずれもあるだろうけどさ。その程度のものに、自分の個性だってしがみついて、特

別な力だと自分自身に言い聞かせてた。ぼくは人の心がわかる。人とは違う部分があるって」

「人の心が読める」そんなの、共に時間を重ねれば、誰でもできることだ。完全に正しく他人をわかることは不可能だ。けれど、一緒にいれば相手が何を考えているのか、どんな気持ちでいるのか、気づけることだってある。そんなごく当たり前のことを、自分の力だと信じないと進めないくらいに、ぼくは何も持っていなかった。

「普通って何がだめなの？」

香山は眉をひそめた。

そう言えるのは、香山が自分だけのものを持っているからだ。人より速い走力も、それを放棄した後悔も、真剣さを捨てられない今の自分も、香山だけのものだ。

「もしさ、普通がありきたりでつまらないって意味なら、梨木は普通じゃないから」

「そうかな」

「そう。普通とか平凡とかよくわかんないけど、少なくとも俺にとっては普通じゃない。だってさ、突然体育館で俺のこと励ましだしたかと思ったら、二回も一緒にマラソン大会出てるんだぜ。これのどこが普通？」

香山はそう笑った。(5)香山の他意が含まれない笑顔は、見ているだけで胸のつかえを取ってくれる。

「しかも、お互い勝手にエントリーされてるしな」

ぼくも笑った。

（瀬尾まいこ『掬えば手には』）

★三雲さん…小学校時代から中学三年まで不登校だった生徒で、梨木とは小学校からの同級生。中学三年の十月、初めての教室で緊張している三雲さんに、梨木は夏服で登校したことを気にしているのだろうと思って、自分なんか学ランの中はTシャツのままであると言ってその場を和ませ、三雲さんは緊張がほぐれた。この三雲さんが現在の河野さん。通信制の高校に通い、高校二年生の時、河野姓に変わる。梨木との連絡は数回程度だったが、大学進学を決める時、どうしても梨木と同じ大学に通いたいと強く思っていた。大学では明朗快活に過ごしている。

問一 ――(1)「とんでもないことをしてしまった」とありますが、「香山」にとっては、どういうことが「とんでもないこと」にあたりますか。文末を「…こと。」という形にして三行以内で説明しなさい。

問二 ――(2)「香山は声に出して笑った。」とありますが、このときの「香山」の心情を説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 楽しむことを中心とするサークル活動の空気になじめなくなったのは、走ることを真剣にやってみたいと決意したからであるが、いまさらそれに気づいても遅いと、自分の情けなさを笑っている。

イ 辞めずに続けていれば陸上選手になれたかという質問から、必死に練習を重ねても思うような記録は出せない陸上界の現実を梨木はわかっていないと、心の中で苦々しく感じながらも笑っている。

ウ 本気で走ろうと思ったことは、この間のマラソン大会まではなかったので、梨木に会ってから急に走りたくなった自分の軽率さが恥ずかしく、同時に、夢を諦めない自分を励まそうと笑っている。

エ 楽しむだけのサークル活動を物足りなく感じ、辞めてしまった陸上を今度こそ真剣にやって自分の力を試してみたいと思うものの、今さらそのことに気づいても遅いと自分の愚かさを笑っている。

問三 ――(3)「『でもさ、梨木と走ってよかった。』」とありますが、ここで「香山」と「梨木」は、お互いに感謝しています。それぞれの心情を、主体（誰がか）を明示して二行以内で説明しなさい。文末は「…心情。」としなくてよい。

問四

――(4)「『ぼくはさ、中学三年生の時、他人の心が読める能力があるかもって』」とありますが、ここで「梨木」が「香山」に語った内容をまとめたものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選びなさい。

ア 人の心が読めることは、共に時間を重ねれば誰にでもある程度はできることなのに、普通で何の特徴もないことに悩んでいた梨木は、そんな当たり前のことを特別な力だと信じ込ませなければ進めないくらいに、何も持っていないと思い込んでいた。

イ 不登校だった三雲さんを助けた時、周りからエスパーだとはやし立てられたことがきっかけで、自分には人の心を読む力があると信じ込んできた梨木は、特別な能力を持ちながらも、それらを真剣に認めてこなかった家族に原因があると思っていた。

ウ 人の心を完全に読むことはできないが、当たり外れはあるものの、ある程度はできるようになっていた梨木だったが、香山にとっての陸上のように、特別な力を信じて真剣に取り組もうとする強い意志を持つことはできずに終わったことに悩んでいた。

エ 運動も勉強も普通で特徴がないことに悩んでいた梨木は、人の心が読めるという自分の特別な力を頼るあまり、相手が何を考えているのか、どんな気持ちでいるのかという、ごく普通の配慮に対しては何もしてこなかったことを後悔していた。

問五

――(5)「香山の他意が含まれない笑顔は、見ているだけで胸のつかえを取ってくれる」とありますが、ここでの「梨木」の心情を三行以内で説明しなさい。文末は「…心情。」としなくてよい。

問六

[A]・[B]に入れる語として最もふさわしいものを次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。（ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。）

ア ペコペコ　**イ** きっぱり　**ウ** フラフラ
エ げっそり　**オ** ズルズル　**カ** がっくり

問七

(一)

Ⅰ [Ⅰ]に入る漢字二字を書き、「はっきり言わないでおいた」（「[Ⅰ]を濁した」）という意味の表現を完成させなさい。

Ⅱ [Ⅱ]にひらがな二字を書き、「手抜かりや無駄がなくこなせる」（「[Ⅱ]なくこなせる」）という意味の表現を完成させなさい。

Ⅲ [Ⅲ]にひらがな一字（漢字でもよい）を書き、「なるほどと思えない」（「[Ⅲ]に落ちない」）という意味の表現を完成させなさい。

(二)

[a]には、「誇らしげに、得意そうにふるまう様子」という意味の四字熟語が入ります。正しい四字熟語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 我田引水　**イ** 馬耳東風　**ウ** 美辞麗句
エ 意気揚々　**オ** 唯一無二

(三)

次のb～dの意味説明にあたる四字熟語を、それぞれの空欄に正しい漢字を書き、完成させなさい。一つの四字熟語内の[　]には同じ漢字は入りません。

b　言葉に出さなくても気持ちが通じ合っていること。
＝（「[　]心[　]心」）

c　細かいところは違っているが、大体は同じであること。
＝（「[　]同[　]異」）

d　大いに飲み食いすること。
＝（「[　]飲[　]食」）

問八 本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 香山は、足の速かった中学一年生の時、体育教師に目をかけられて厳しい陸上の練習をさせられ、耐えきれずに辞めてしまって以後は、本気で走るのが怖くなって周囲に気づかれない程度に流して走るようになった。

イ 梨木は、他人の心を読むという自分の能力が周囲から認められたとき、三雲さんが初の登校で席に着きにくそうにしていた中学三年生の頃を思い出してみたが、それもただの偶然かも知れないと考えるようになった。

ウ 香山は、以前梨木が体育館で自分を励ましてくれて、それをきっかけにこれまで二回もマラソンを走れたことがとても特別なことに思えてきたので、やはり普通にすることで気づけることもある、と梨木を励ました。

エ 梨木は、香山の持っている陸上に関する経験のすべてが香山本人の特別なものであり、やはり自分には特徴がないと悩んでいたが、香山からはむしろ梨木こそ特別な存在だと言われ、悩みが解消されたように感じた。